

総合討論

司会（柳澤悠）：ありがとうございました。たくさんの論点を出していただいたと思います。大江先生からの問題提起、コメントを含めまして、四つの論点を中心に議論したいと思います。最初は、コミュニティアニズムと福祉、エコロジー。政治哲学の理論とそうした福祉、エコロジーの理論がどのように絡んでいるのか。どちらかという理論的な課題の中での議論です。二点目は、その中で特にコミュニティという問題。規模であるとか、性格であるとか、中心であるとか、どういうものが想定されるのか。コミュニティというものをどう考えるかという点が二つ目です。三つ目は、具体的な資源、コモンズとか共同資源、そういう問題を議論したい。四つ目に福祉とコミュニティについて。これは大江先生から専門性というものとコミュニティであるとか、あるいは地域と福祉の関連などの問題が出されています。このような四つの点で議論していきたいと思います。とりあえず最初の点について、倉阪先生から、ご発言があればよろしくお願いします。

1. コミュニタリアニズムと福祉、エコロジー

倉阪秀史：小林先生、コメントありがとうございました。初めの点ですが、私自身コミュニティアニズムについてまだ勉強を始めたばかりですが、先生のコメントの中に第1世代と第2世代というように、コミュニティアニズムの中で変遷があるというお話がありました。その点をもう少し詳しく教えていただければありがたいと思います。特に、近年の展開ということで、エコロジカル・コミュニティアニズムというような話がありますが、私もこの言葉にはかなり関心があります。どういった方がどのような議論をされているのかということ

について、教えていただければありがたいです。

小林正弥：ありがとうございます。コミュニタリアニズムの世代論として、私が考えている第1世代として、チャールズ・テイラーやそしてそのお弟子さんであったサンデルがいます。サンデルがロールズを批判したところから現在のコミュニタリアニズムが始まる。それから有名なところでは、マイケル・ウォルツァーやマッキンタイアやベラー。こういう人たちがコミュニタリアンの第1世代であるというふうに言われてきたわけです。

実は世代的には、社会学者のエツィオーニは、第2世代というよりも第1世代に近いわけですが、先ほど言ったように、コミュニタリアニズムを自称して、コミュニタリアンとして、コミュニタリアニズムの運動を開始し、活発に実践的な運動や政策提言をされています。そこで、第2世代として扱っています。他にも、例えば社会学者のセルズニックなど、この言葉を肯定的に使う人たちが現れているので、私はその人たちを第2世代と呼んでいます。

だから、第2世代でもかなり高齢の方もいらっしゃるわけですが、さらにその後、より若い世代から新しい展開を企てている人たちが現れ始めていると私は認識しています。それを第3世代と呼び、その中の一つの潮流がエコ・コミュニタリアニズムではないか、というのが私の考えです。

例えば、若いダニエル・ベルなどはこの第3世代に入ると思います。彼はアジアにおいて、ヨーロッパとアジアの関係を意識しながらコミュニタリアニズムの議論を展開している人です。また、先ほど言ったアブネル・デ・シャリットは超世代的なコミュニタリアニズムという考え方を提起しています。私自身もこの分類では、この中に入るのではないかと考えています。私がエコ・コミュニタリアニズムということを言いかけていたところ、実は海外にも同じような議論があるということを知って、今日、紹介したわけです。

広井良典：コミュニタリアニズムとエコロジーの関係について、基本的なこと

で議論できればと思います。まず概念規定ないし用語法に関するものですが、ヨーロッパでの政治哲学の分類は、保守主義、自由主義、社民主義というもので、その座標軸と、どちらかというと北米に強い、コミュニタリアニズム、リベラリズム、リバタリアニズムという分類とのかかわりを意識する必要があると思います。

知っている人はよく知っているのですが、日本で十分に自覚されていない論点として、リベラリズムという言葉の意味がアメリカとヨーロッパでほとんど正反対であるという点があります。アメリカ中心の政治哲学の議論ではリベラリズムというのは、ロールズ的な議論を含めて、むしろ政府の積極的な政策を重視するわけで、市場主義はむしろいわゆるリバタリアニズムになるわけです。これに対しヨーロッパの場合は自由主義というのは本来の意味の自由主義、つまり政治哲学系の議論でいうところのリバタリアニズムに近い自由主義になります。英語で言うとりベラリズム（liberalism）ですので非常に紛らわしいのですが、ロールズ的なリベラリズム、あるいは福祉国家のようなあり方はヨーロッパの場合はむしろ社民主義になります。

そうした用語法の異同が生じているという点も踏まえた上で、ヨーロッパの場合、環境保全運動にはむしろ保守主義が指導的な役割を果たしてきたという流れがあると思います。つまり、conservatism というのは、これはヨーロッパでよく聞かれる議論ですが、本来、コンサベーション、保全を理念とする政治理念です。日本では保守主義がダムや道路造りに邁進するという非常にねじれた構造があるわけですが、ヨーロッパの場合は歴史的な町並みの保存や自然保護といった流れにおいて保守主義、キリスト教民主主義などが主導的役割を果たしてきています。

本来、そういう傾向も踏まえると、コミュニタリアニズムとエコロジーというのは、エコロジーも定義によると思いますが、自然保護や環境保全に対しては、本来は親和的であって、共同体や自然の伝統を重視するというものです。また他方ではエコロジーというのは左派的な要素もあるので、最終的にはドイ

ツの場合も社民主義と一度分かれてまた統合したこともあります。そこらあたりがかなり錯綜していると思います。その点を踏まえて、小林先生にコミュニタリアニズムとエコロジーの関係について、そのあたりどう考えたらいいか、お考えがあったらお願いします。

小林：これは政治哲学のかなり広い範囲にわたる重要な議論ですが、広井先生がおっしゃるヨーロッパとアメリカとの用語法の違いは、もちろんあると思います。そしてアメリカの場合は自由主義のコンセンサスがあって、それに対抗する共産主義、社会主義とか、保守主義を露骨に擁護する議論は歴史的に非常に弱かったので、自由主義のコンセンサスの中で、ヨーロッパの経済的保守主義に相当するリバタリアニズムと、社民主義にある程度近く平等を重視するようなりベラリズムという、自由主義の中での分化がありました。だから、概念としてヨーロッパとは違う形に展開をしてきている。確かに今申しました政治哲学の構図はアメリカの政治哲学の構図を意識していますので、ヨーロッパの議論との関係を考える際には注意する必要があります。

コミュニタリアンの中でも、エツィオーニはコミュニタリアニズムを明確に規定しようとしています。サンデルの議論では、コミュニタリアニズムはロールズのなりベラリズムに対する批判として展開してきたわけですが、エツィオーニは、いわゆる保守主義や権威主義とは違うということも強調して、リベラルと保守主義の「中道」の思想であるというふうに、コミュニタリアニズムを規定したわけです。

その意味で、中道の思想という点で、コミュニタリアニズムはギデンズの「第三の道」とも非常に近い関係にある議論であるというふうに言われています。そこで、リベラルよりは社民に近いのですが、福祉国家論に立つかつての社会民主主義とは区別した方がいいところもあると思います。

また、コミュニタリアンの中でどちらかという伝統的なコミュニティや倫理を強調する人もいて、例えばマッキンタイアのような人は、コミュニタリア

ンの中でもやや保守的なイメージがあります。他方で、マイケル・ウォルツァーはもともと急進派の人で、明確に社会民主主義に立っており、その再構成の論理としてコミュニタリアニズムに接近しています。彼の議論は、コミュニティとかメンバーシップを強調しながら、社会民主主義を再構築していこうとしているので、コミュニタリアンの左派というふうに彼のことを言う人もいます。ですから、コミュニタリアンの中にも、思想的ないしは政策的な立場の違いというものとは若干存在するわけです。

環境思想との関係について、確かに広井先生がおっしゃるように、ヨーロッパでは保守主義や権威主義からの流れもあるわけですが、私はコミュニタリアンの文献の中で、そちらのほうからエコロジー理念を展開したものはあまり意識していません。これはアメリカ的な構図なのかもしれませんが、どちらかというとトリベラリズムを思想的に前進させるという感じで、エコロジーのほうに向かった人が多いという印象を持っています。

吉永明弘（千葉大学 COE フェロー）：今の先生方のお話にそれぞれコメントと質問があります。まず倉阪先生はエコロジカル経済学とコミュニタリアニズムを結び付けて、ローカルな資源管理の持続可能性を図ろうという趣旨だと思いののですが、もう一つ、ローカルといった場合に、その地域特有の管理方法とか、かかわりのあり方というものがあると思うのですが、それが結局は持続可能性に結び付くという論点があると思います。それは自然的、文化的な多様性、いわゆる風土的な多様性ということをどのように考えるかということだと思うのですが、その点は今回はあまりなかったように思いますので、そのへんについてコメントをいただきたいと思います。

コミュニタリアニズムとの関係でいうと、私自身はマイケル・ウォルツァーの本を読んでいまして、このウォルツァーという人は他のコミュニタリアンとは議論の力点がやや異なっているのです。他のコミュニタリアンが主に西洋の伝統に依拠しているのに対して、ウォルツァーは文化人類学者のクリフォード・

ギアツなどに依拠して、歴史学や文化人類学における非西洋社会を含めた地域研究をふまえて、コミュニティの具体的な多様性に注目しています。その点からいうと、このウォルツァーの議論が、今なされている「コモンズ論」や「地域環境論」に最も近いのではないかと私自身は思っています。このウォルツァーに『正義の領分』（而立書房、1999年）という本があるのですが、それは社会的共通資本を風土的多様性の観点から擁護したものと位置付けることができるのではないかと考えているので、おそらくそのへんの議論と倉阪先生の議論はもっと深くつながっているように思います。

それからその話は、ローカル・ノレッジということをどのように考えるかということにつながってくると思います。広井先生の議論であったような、独立した個人の熟議ということですが、地域の中にはそういう独立した個人の熟議というスタイルが性に合っている人もいれば、そうではないローカルな因習とか伝統的知識に基づく暗黙知の世界に生きている人もいて、その二つは対立するものなのかどうか。ローカルな地縁的管理という観点からするとその二つはむしろ両方あったほうがいいのではないかと思います。

例えば、中野区では独立した個人の議論の場としての住区協議会と、いわゆる因習的な場としての町内会というものが共存していた時期がありました。最近住区協議会が廃止されてしまったので、状況が変わっていますが、以前の時期のようにどっちもあるほうが望ましいと思っています。その点についてどう思われるかということを広井先生に質問したいと思います。

お二人に共通した質問ですが、二人とも「社会関係資本」ということをおっしゃっています。おそらく環境との関係で社会関係資本ということを行った場合には、ジェイコブスという人の「四つの原則」に関する話が一番かわりがあると思うのですが、その点についてどう思われますか。ついでに、そのジェイコブスの本は黒川紀章さんが訳されているので、黒川紀章さんよりもむしろジェイコブスの議論のほうがお二人の議論には近いのかなと思ったので、ジェイコブスについてどう思われるか。この3点をお願いします。

倉阪：コメントありがとうございます。風土的多様性をどう考えるかということですが、討議民主主義の参加者やステークホルダーの中核のひとつとして、そこで育てられた人が含まれなければならない。そういった形でその風土が反映されるということになるのではないかと思います。そこについての議論は、2006年1月に行った風土論シンポジウムの議論につながってくると思います（『公共研究』第3巻第2号特集を参照——編集部注）。ジェイコブスの四つの原則というのはどういう話だったか、簡単にお話しいただければと思います。

吉永：専門外なので、私が説明するのにふさわしいかどうか分かりませんが、他分野にも有名な話ですので、アウトラインのみ紹介したいと思います。都市計画を近代主義的に大掛かりにやるのではなくて、むしろその地域にもともと存在するものを活かしていくというのが基本的なコンセプトのようです。四つの原則の第一は、「ゾーニング批判」で、ここは商店街、ここは住宅地と決めるのではなく、店や住まいなどが全部一体的になっている町のほうが望ましい。二つ目は「小規模ブロック」。大型車が通るような道で都市計画をやるのではなく、ブロックごとに歩いていけるような小規模ブロックの町づくりが望ましい。三点目は、古い建物の保存ということですが、意図としては「さまざまな時代の建物が共存」している状態が望ましい。建物の多様性があることが望ましい。その観点から古い建物はあまり壊さないほうがいいということです。四点目は、「密集」している状態にある地域ということです。分散して生活するのではなくて密集しているほうが望ましい。この四点です。都市計画やまちづくりの際に、これらに配慮すれば、いわゆる「社会関係資本」が豊かになる、ということをジェイコブスは主張しているようです。この話は、お二人の議論に親和的なものではないかと思うのですが、どうでしょうか。

倉阪：どこかで聞いたことのある話だと思ったら、宇沢先生も『社会的共通資本』（岩波新書）で書かれていますね。宇沢先生がジェイコブスについて紹介をして、

そういった都市に住んだほうが豊かな生活ができるという文脈でふれられていた話ですね。その背景には、今吉永さんがおっしゃったような、そちらのほうが社会関係資本が培われ、お互いの関係が密接になっていくというような考え方が背景にあると思います。

水島治郎(千葉大学法経学部)：広井さんはコミュニティの担い手となるべき「自立した個人」の重要性を力をこめて主張しておられましたが、その点についてコメントしたいと思います。吉永さんのコメントとも関連します。

戦後日本において、特に戦後民主主義のような進歩的な立場からは、日本の旧来の前近代的・農村的なコミュニティをファシズムの温床と見た上で、これを克服・解体し、自立した個人からなる近代的な社会を築くことが民主主義の前提となるはずだ、という議論がなされてきたわけです。いわゆる「日本的」な人間関係を克服し、自由で自立した諸個人が現れて初めて、真の日本の近代が到来するということだったのではないのでしょうか。

しかしむしろ現実の日本社会においては、まっさらな所に建設された郊外の新興住宅街は別とすれば、農村部はもちろん、都市部においても意外にウェットな、一種前近代的な香りを残した人間関係が残っているように思います。

もちろん、そのようなコミュニティの人間関係の保守性、封建性を批判することは可能です。しかし広井先生のおっしゃったような福祉地理学の議論ともからむのですが、現実には人々が困ったときに頼りになるのは、やはり自分の生きている地域のコミュニティです。そしてウェットであり、おせっかいで鬱陶しくもあるような地域の人間関係が、実は自分が困ったときにすぐ手を差し伸べてくれる関係でもある、ということもあるのではないのでしょうか。「自立的な個人」を主張することにはもちろん意味があるとは思いますが、現実にはむしろ「自立せざる個人」のほうが相互扶助のネットワークに引っかかって守られている、という面も無視できない。なかなか悩ましい問題だと思います。

2. コミュニティをどう考えるか

司会：今のご意見は、既に次のテーマといいますか、コミュニティそのものをどのように考えるか、都市的環境におけるコミュニティの問題や生活における共同性の問題、あるいは専門性の問題もあるかもしれない。そういう問題を含めて少し議論をしていきたいと思います。

広井：今、吉永さんと水島先生が言われたことは相互に非常に関係していると思います。まさに私にとっては今日の一つの核心になります。つまり吉永さんの言葉で言えば、ローカルな暗黙知的な部分と独立した個人の熟議は両立できるのではないかと、という点です。私は独立した個人の方向を強調しましたが、同時にローカルな伝統的な部分をもっと積極的に活用していいのではないかと考えます。まさに両方が必要だというのが私の結論で、もしかしたら、今日はやや独立した個人という点を強調したように聞こえたかもしれませんが、もちろんそこは強調したいところではあるのですが、しかし同時に今日の発表の中では鎮守の森とかお寺とかそういう伝統的なものの話もいろいろしたわけです。「コミュニティ形成の二つの原理」ということで示したりしましたが、同心円で広がって一体的につながっていくというベクトルと、個人としてつながるというベクトル。あえて言えばそれぞれ「共同性」と「公共性」にも対応するかと思いますが、これらは内容において異質な性格のものですが、しかしそうでありつつ両方がそろったときに、最もバランスが取れた望ましい姿を実現できるのではないかと、やや抽象的な言い方で恐縮ですが考えています。

今日の最後のほうに、「時間コミュニティ」と「空間コミュニティ」の融合とか、「ミッション型（テーマ型）コミュニティ」と「地域コミュニティ」の融合といった話をしました。さらに話を広げますと、グローバルレベルでもやはりこの両方が必要だと思っていて、つまりグローバル・コミュニティ的な一体的にすべてつながっているというベクトルと、あくまで個人が独立した上でのつな

がりという両方が必要だと思っています。

大江守之：懐かしい学生時代に読んだ『アメリカ大都市の死と生』の話が出てきたりして、もう中身は忘れてしまったのですが、少し親近感を抱きました。私はもともと出身が地理学と都市工学であることもあり、また人口研究でもかなりデータに依拠した研究をしてきたので、それまでの議論、社会科学における諸概念や海外における研究成果に関する議論にはついていけないという感じがありました。

そうしたなかで突然ジェイコブスの話になって、小規模ブロックや建物の多様性、ゾーニングの話などが出てくると結構びっくりしてしまうのです。やはりジェイコブスがアメリカのどういう状態の都市の、どういう場所についてのことを議論したのか、そこからどういうふうに概念構築をしていったのかというところが重要で、そういうものを切り離して議論してしまうと、ジェイコブスの主張を正しく受け止めることができないように思います。

ジェイコブスの議論と関係のある日本における「まちづくり」の原点というのは、西は神戸の真野であり、東は京島であり、あるいは世田谷区の太子堂でありと、そういう非常に濃密なまちづくりの活動をやってきた場所があるのですが、それは逆にいうと例外的と言ってもいいぐらいのものなのです。そこで得たまちづくりに対する概念というものを既成市街地にすべてに当てはめられるかというとしてそうではないということもあって、抽象と具体の間を行き来するときに注意しなければいけない部分があるような気がします。海外のまちづくりに関してはなおさらだと思います。

既成市街地と対照的と考えられる郊外は本当に対照的なのでしょうか。現在の東京圏、大阪圏、名古屋圏に住む人口は、おそらく今、日本の55%ぐらいにいていのでしょうか。それからDIDに住む人口割合65%ぐらいでしょうか。そういうふうに、都市的なフィジカルな環境に住む人というのは、日本の3分の2ぐらいいるわけです。もちろんその中には既成市街地も郊外もあるの

ですが、既成市街地でもいわば寅さんの世界である濃密な地域社会はおそらく例外的であり、市街地の形態的な差はあっても、多くの人が郊外的ライフスタイルを選択していると思います。

その本質は、核家族であるということと、その核家族というものが生産にしても消費にしても、それからさまざまな日常生活にしても、さっき述べたように専門システムに強くつながっているということです。その分だけ周辺の近隣コミュニティに依拠している度合いは少ない。確かに町内会・自治会というものはいまだに機能していますが、それはいわば行政の末端組織的な意味合いとして機能しているのであって、住民側から見たときに、先ほどのアンケートにもあるように自治会・町内会が十分機能しているという認識を持つ地域は極めて少ない。そういうことも、実態との関係の中で議論しなければいけないというふうに私は思います。

それから独立した個人ということに関しても、日本の現在の文脈の中で独立した個人を語るのは、何か据わりが悪い。旧来の共同体的なしがらみの中にいる個人とは違うモデルを考えようとするときに、別の立て方があるように思えます。いま私がフィールドとして入っている横浜市郊外の戸塚に、横浜の中でも一番先駆的だと言われている取り組みをしているドリームハイツがあります。ここは今年、横浜市がエリアマネジメントのモデル地区にも選んで、エリアマネジメントとは何かということをそこで考えようという一つにもなっています。この郊外コミュニティにおいてある種の信頼を得ている人たちを見ていると、近隣コミュニティの成員という位置にあるのでもなく、また専門家として時間やスキルをお金で代替するという位置にいるわけでもない。そういう意味では中間的で、人格的なかわり合いもするし、しかしそれは時間と場所を限って当事者に関わっているように見えます。

私はそういう人たちを見ながら「弱い専門性」ということに気が付いたのですが、それは専門システムとして弱いし、かちっとしていない。ダイレクトに個人と個人が何とかしてという世界ではなく、あるいは逆に近隣だから、隣同

士だから助け合うんだという世界でもない。一方で、単純に貨幣で代替されてしまうような世界とも違う。こうした活動や関わり方を強化しない限り、いま起きているさまざまな問題は、私は解決できないのではないかと思います。

すみません。勝手に自分の主張を述べてしまったのですが、いろんな使われている概念と実態との関係というのがかなり気になるので、その辺りはどういうふうこれから議論していけばいいのか。そこを一番ここで聞きたいなと思ったところです。

司会：もしよろしければ、発言させていただいてよろしいですか。私は2006年の12月にアジアのコモンズについての国際会議を開きました（『公共研究』第4巻第3号特集を参照——編集部注）。それぞれアジアの地域の専門家がコモンズをどう議論し、どう考えるか。日本における入会地のような共同性というのが自明なものではない。アジアの中では、日本は共同体意識が強くあったと思うのです。しかしそれはアジアのその他の地域において自明にあったわけではない。これが一つの発見でした。

例えばタイの場合は、ほとんど入会地の規制のようなものがなかった。自然が豊富にあったのでそんなものは必要なかったわけです。それが1960年代にだんだん自然資源が不足してきて共同的な規制ができていく。あるときそこで地域的なムラが出てくるのです。タイの中では今、非常に強くムラをつくろうというか、そういう自然管理を共同的にやろうという運動があるわけです。そういう運動では、昔はあったのだという観念がとても強くて、それを再現するのだという。ところが現実にはどうもなかったみたいで、実態ではとにかく1960年代以降にいろいろそういう自然管理のムラができてくるわけです。

私がここで言いたいことは、必ずしも昔からそういうムラがあったということとは自明ではないのではないかと。むしろ割合に現代的な状況の中で、そういう地域的な共同性というのはつくり得るのではないかと。だから、今のお話でいうと、例えば都市的な環境の中で、必ずしも今までなくてもある種の共同性とい

うのはつくり得るのではないか。ある意味では運動してつくっていく。それが一つです。

それから、その際に、これは私がインドの場合を申し上げるのですが、インドの場合には、ある種の共同的な自然管理があったと思うのですが、それは民主的ではないのです。民主的でなく、ごく少数の人がコントロールするようなシステムになっていたと思います。ところがそれが意味でだんだん民主化されてくる。民主化されてくるというのは自然管理のシステムが多少壊れるのですが、そこの中で新たな自然管理のシステムが部分的ですができ得る、できつつあると。ここでは、伝統的なものがそのままではなくて、ある意味で基本的な原理を少し変えながら、そこで新たな共同性をつくるということがあり得るのではないか。

ですから、伝統的なものがそのままあるわけではない。それは変わらなくてはいけないということ。それから、そういう中で新たな何というか、個人まではいかないと思いますが、比較的伝統的なタイプの共同性から自立した個人が新たにまた共同性をつくり得るといふ、そういう可能性があるのではないかと考えています。

倉阪：ローカルな場合には、伝統的なものを活かしながら共同で何かつくっていくとか、あるいはローカルな熟議的な個人を想定することはできるように思うのですが、これが例えば地球温暖化に対応するといったグローバルレベルになると、なかなか共同性的なものが見いだしがたいというか、つくり上げようと思ってもなかなかつくり上げられないという状況にあるかと思います。

そういった場合に広井先生は、グローバルレベルでも両方が必要だというふうにおっしゃったわけです。あるいは小林先生もグローバル・コミュニティアニズムといった観点で、そちらのほうを重視していくというふうにおっしゃったわけですが、その場合に、共同性は本当に確保できるのだろうかということが私自身よくわかっていないところです。その辺りについてコメントをいただ

ければとありがたいです。

小林:今の質問に対してのコメントです。私は今日、分類としてコミュニティを幾つかのカテゴリーに整理しただけで、「何がいいか」という話についてはあまりしませんでした。先ほど広井先生は農村型と都市型を分けた上で、ローカルな伝統的な部分と独立した個人の両方が大事だという話をされました。これは共感するところが多い話です。

さきほどお話したように、今までの普通の社会科学の常識では「農村から都市へ、前近代から近代へ」、その意味で「コミュニティからソサエティへ、あるいはアソシエーションへ」というように近代化や発展を語る構図があったと思います。広井先生が整理されていましたが、私はその両方のカテゴリーに長所と弱点が両方ともあるということをしっかり見る必要があると思うのです。ローカルなコミュニティの方では自発性とか自由とか開放性を強化して拡張していくことが重要だろうし、逆に都市の方はコミュニティとしての一体感をどういうふうに構築ないし再現していくかという問題意識が必要だろうと思うのです。ですから、双方とも弱点を補って長所を生かすような、そういう方法を考えたほうがいいのではないのでしょうか。

コミュニティアリズムは、どちらかの類型のみを良いとするのではなくて、両方をコミュニティアリズムのカテゴリーの中で考える思想なので、今後のコミュニティのあり方を、バランスを考えながら状況に応じて考えていくことになるだろうと思うのです。

それから、いま倉阪先生がお話になったグローバルな話については、コミュニティアリズムは、ローカルなコミュニティには実際に伝統もありますし、ナショナルなものもできていますから、それらの伝統を強調するわけです。しかし、もともと国民国家のコミュニティにしても、近代において形成されてそれが今日の伝統になったものなので、歴史の進展の中で、より大きな範囲のコミュニティができてくるということは十分に論理的にはあり得ると

思うのです。ただし、現在はグローバリゼーションがスタートし始めていても、まだアイデンティティー形成まではいっていないので、「本当にできるのか」という疑問が出てくることは避けがたいのです。現在は生成中ではありますけれども、いまだ規範的な課題なのです。

私はこの問題について、最近、スピリチュアリティについて、グローバル・スピリチュアリティという新しい考え方が必要なのではないかと考えています。ローカル・レベルにしてもナショナル・レベルにしてもアイデンティティーの基礎は、「自己や世界をどう見るか」ということから始まるので、そういった精神的次元がないと、やはりグローバルなアイデンティティーの形成は難しいだろうと思うので、「まずそれが必要なのではないか」という問題提起をし始めたところです。

いずれにしても、グローバル・アイデンティティーやグローバル・コミュニティの形成は規範的な課題であり、これがないとグローバルな政治経済問題の解決が難しいので、そのために我々が努力すべき課題なのではないかと思います。そして、「それを実現するためにはどうしたらいいか」というふうに考えるしかないのではないか、という気がします。

広井：今のお話に関連しますと、倉阪先生が提起された地球レベルでのコミュニティ意識、共同体意識みたいなものは果たして可能かということについて、「可能性と限界」ということでコメントします。可能性という意味では、例えば、ナショナリズムというのはまさにコミュニティとしての国家ということで、共同体の範囲を国家の中にまで拡張しているわけです。

よく言われる議論ですが、江戸時代の人々にはそもそも「日本人」といった意識はなかったが、明治以降にそうなった。けれども、ナショナルなレベルの共同体意識というのは考えてみれば、「想像の共同体」の議論ではないですが、見知らぬ人の集合体をあたかも共同体のように規定するわけで、本来自明なものではありません。それが可能であるならば、可能性としては地球レベルの共

団体意識ということも決してとっぴなことではないということが可能性について考えられることです。

限界ということに関しては、しかしやはり、倉阪先生の研究されているコミュニティ感覚というものが必要になると、そういう全く文化も何も、空間的な距離も遠い人間同士が本当の意味でつながっていけるというのは極めて困難です。そういうことからすると、先ほど両方必要だと言った話になりますが、独立した個人がつながるという公共性というベクトルとセットにならないと、大きなグローバル共同体というだけでは弱いと思います。また改めて言えば、共同体が持つある種の閉鎖性というものが常にある。さらに限界という意味では、グローバル化を拒否する地域というのがあっていいとは思っています。逆に共同体意識でどんどん取り込んでいくというのは、またある種の問題を含んでいるのではないかと考えていますので、そこを留保として付け加えたいと思います。

それから大江先生が先ほど言われていたことで、弱い専門性に関して、確かに独立した個人かローカルな共同体的なものか、というのは非常に概念的で二者択一的なものです。実際に日本でいろんな動きが各地で進んでいくのは、大江先生が言われたような緩い専門性とか、独立した個人という要素とローカルな面を生かしたものというのがある意味で混然一体となっているような動きが各地で進んでいる中で、いろいろな展開が実現していくのかなと思います。そういう意味では、ケーススタディがますます重要ではないかと思います。

岡部明子 (千葉大学工学部) : 私は工学部の建築学科にいまして、都市計画を専門にしております。また他方で、先ほど宇沢先生の名がでしたが、私はいま同志社で社会的共通資本研究センターの客員フェローで、社会的共通資本のことがいつも頭の片隅にあります。今日の話は私の関心のちょうど真ん中にあるお話で、大変刺激的に聞かせていただきました。

今までされていた議論で、3点申し上げたいことがあります。1点は先ほど大江先生が指摘されましたが、いきなり具体的な都市計画の話がこうした政治

哲学あるいは行政学の分野で突然出てくるときにドキッとするという思いがあります。先ほどのジェイコブスの話もそうですし、広井先生の中でのコミュニティの中心というのがハード面でのコミュニティの中心の具体的なイメージと関連づけて話されていました。唐突に都市計画分やの具体的な話になり、その落差ということにびっくりさせられます。吉永さんのコメントに関しましては、おそらく黒川紀章さんの話をここでもってくるよりも、むしろジェイコブスの話を持ってきたほうがよりベーシックなところでつながるのではないかと、そのほうが吉永さんの本意が伝わるのではないかと思います。

2点目は、私も広井先生の話聞いてまして、最後の個人の確立ということ強調されたところには引っ掛かりました。欧米がいま個人主義をベースとしながらもその限界を感じ、助け合いの社会に移行しようと模索しているときに、日本的な人間関係でもってより建設的に克服できる可能性はあるのではないかと、むしろそのほうにローカルなレベルでは私自身も期待しているところです。

3番目が一番肝心な問題なのですが、コミュニティに関することです。このコミュニティを何で定義するかということについて、デランティを援用されまして、倉阪先生が共通点の成立する範囲にするのか、あるいはコミュニティの感覚の及ぶ範囲なのかという整理をされました。倉阪先生のほうはどちらかというと共通点のほうに寄った見解を示され、広井先生のほうは非常にコミュニティ感覚に近いものを示されたのではないかと思います。

私が問題提起したいことは、共通の資源の存在自体がコミュニティを存続させているという倉阪先生の解釈は、確かにコミュニティの定義を明確にいたしますし、かつグローバルに展開させるときの危うさというのが回避されて優れていると思う一方で、その限界があるのではないかとということです。それはどうということかということ、共通点のとらえ方、あるいは資源・資本を goods のほう、良いほうのものを念頭に置いている点です。つまり、共通のポジティブな資源を守っていこうとする考え方です。資源・資本は良いものばかりなのか。当然表裏一体なので言葉のあやと言われるかもしれませんが、そこには共通の

危機を回避していかなければいけないという側面があります。さらに共通の資源でも必ずしも人間に有用なものばかりではなく、人間に悪い影響を与えるものもある。しかしそれも例えば自然資本の場合は連関しているわけです。悪いものもあるから良いものもある。これは社会関係資本についても言えることでして、人間関係が濃密ながら良いことも起こるかもしれないけれども、犯罪組織となることもあるという側面を持っているわけです。その両面、明るい面と暗い面の両方合わせて、それを、倉阪先生がおっしゃる何がしかを共有しているというふうにとらえていく方向というのがあり得るのではないかと私は考えます。この点についてどんな見解をお持ちかがいたい。

一つ具体的な例をお話ししますと、いま国土交通省で土地制度に関する委員会で委員をしているのですが、そこで町内会や自治会というものと、建築協定のために必要な住民の組織の違いが一度議論になりました。建築協定の場合は良好な住宅地を守っていくために、つまりそれが共通の資源になるわけで、そのための会つまりコミュニティです。これに対して、自治会や町内会というのは伝統的なコミュニティで、空間をそもそも共通にしているというケースです。

そこで議論になりましたのは、建築協定のほうが守ろうとしている共通の資産は、共益というよりは個には分解しがたい集団的な私益ではないか。確かに町並みのようなものは集団でなければ成立はしないのですが、単にそれは個に分解しがたいだけであって、私益であることに変わりはないのではないか。他方、いま景観、あるいは都市で深刻な問題になっているのは、コミュニティが弱まっていく、人口が減少して空き家が増えているような地域です。ここに関してはなかなか共通の資源を守っていくという発想ではうまくいかないわけです。そこには、共通の資源を守るといってより共通の危機をなんとかしなければいけないという認識があります。そのまま放置すれば、空き家に犯罪組織が巣喰ってしまうというようなより深刻な共通の危機を招きかねません。こうした問題にどう対峙していくのかということが求められるときに、コミュニティ感覚を基盤としたコミュニティで補完していかないとうまくいかない面がある。

地球環境問題も、地球環境を共通の資源ととらえるだけでは必ずしもうまくいかず、同じような面があるのではないかという気がします。

こうしたことで、おそらく大江先生がおっしゃった弱い専門システムというのは、まさにこうした空き家が増えていくようなコミュニティをも救っていくという道を開く、単に良好な高級住宅地の景観を守っていくほうではないものを守っていくということにもつながるのではないか、そう思って話を聞いておりました。

倉阪：コメントありがとうございます。確かに共通の危機を回避するというような観点で組み立てたほうがより広くとらえられると思います。空き家の話は、危機としてとらえるのか、それとも今まであった資源が劣化していくことを防ぐというふうにとらえるのか、まさに表裏一体です。ほかに共通の危機として、もしかしたら外から与えられるような何か天災めいたものに対して共同であらなければいけないといったケースが想定されるかと思いますので、それも入れておいたほうがいいと思います。大変鋭い指摘をありがとうございました。

3. コモンズとコミュニティ

司会：それでは3番目の論点、既に議論が出ていることもあります。もう少し具体的なコモンズというか、自然資源というものとコミュニティというほうに移りたいと思います。この点についてはいかがでしょうか。

大江：その問いですが、コモンズといいますのは、入会林野、入浜のような共有資産と考えていいですか。あるいはさっき例に挙げた横浜の戸塚のドリームハイツは2000戸の分譲集合住宅団地で、建物を区分所有し、土地を共有しています。こうした共同性の実体的な基盤、共同性を成立させる下部構造と共同性のあり方の関係をどういうふうに議論するかという問いと考えてよろしいでしょうか。そうすると、今の都市においてそういうコモンズを持っている社会

集団というのは、マンションで区分所有して土地を共有している人たちぐらいで、それ以外に実体的な基盤を共有しているケースは都市において非常に少ないと思います。所有はしていないけれども、意識的に共有しているケース、例えば、所有権は地方公共団体が持っていたとしても、維持管理は地域に委ねられている里山とか、意識の上で共有されていることで、共同性の契機をつくりだしているコモンズがあると思います。

コモンズに関してはさまざまなスケールがあって、いろいろなスケールで議論ができると思います。基礎自治体に税金で買ってもらって、後の管理は地域でやるというようなタイプのコモンズの持ち方が、ある種の緩い共同性をそこに成立させるか否かという命題に関する議論はあるのかなという感じはします。

倉阪：私の発表での共通の資源という場合にも、それを共同で所有するという形ではなくて、やはり意識的に共通しているというか、共有しているというか、法的関係とは切り離されたもう少し広い概念としてとらえています。

広井：少し論点を広げてしまうかもしれませんが、このテーマが福祉もかわっているということで、最近調査を始めかけているのが、コモンズをめぐる格差あるいはストックをめぐる格差という点です。近年、格差問題をめぐる話題の中でジニ係数の問題がよく議論されるわけですが、実は今日日本で格差が大きいのは、所得の格差以上に土地所有や住宅のストック面での格差が非常に大きいわけです。つまりこれからの時代は、ストックをめぐる分配あるいは福祉の問題と、こういう環境の問題が非常にクロスしている。これは本COEのテーマとも関係してきますが、こういったコモンズとかストックをめぐる分配ないし福祉の問題と環境の問題を統合して考えるという視点は、政策的にも重要だと思っています。

司会：私の問題意識の中では、やはり地球環境問題を地球レベルのコモンズの

問題として考えています。それを地域レベルのコモンズの発想と連動させながら見ていこう。あるいは地域レベルの、例えば森林の問題を考える場合に、地球レベルのコモンズの発想をどういうふうに反映していくか。その地域の資源はそこに居住する人々の資源であると同時に、地球的なコモンズ的な意味も持っているわけで、そのような問題が今あるのではないかなと思います。倉阪先生の議論はそこを意識した議論だと思いますし、またコミュニティの大小といますか、ローカルからナショナル、あるいは地球レベル、それがどのように連動するかというのは大変厄介な問題ではないかと思っています。

倉阪：まさにそういう実体的な基盤があって初めて共同のルールづくり、あるいはコミュニティというものが想定されるのではないかというのが私の考えです。その点、ナショナリズムが可能であれば地球レベルでも可能というのは、ちょっと危うい議論のような気がするわけです。ナショナリズム自体、何らかの具体的な基盤、それも個人にとっての直接の実体的な基盤がない段階でナショナリズムだと言ってしまうと、やはりかなり危ないかなと思うわけです。それがグローバルになったら、受け止められ方によってはもっと危ない議論になるのかなとも思います。そういう点で、私はグローバルなコミュニティが成立するのは、地球温暖化のようなグローバルにリアルな課題が立ち上がって初めて成立するのだというふうに思うのです。

小林：先ほどの実体的な基盤というのは、「確立したグローバルコモンズや制度があって初めてできる」という話と、今の話のように「必要性がある」という議論があります。前者ももちろん大事なのですが、私は後者の方も重視したいと感じています。ナショナリズムにはもちろん問題もあるのですが、私は歴史的な通過点としては、その地点を通過するということは人類史の必然であったのではないかと、と思っています。ナショナリズムは、その起点においては、「国民国家の共同体をつくってデモクラシーをつくっていく」という課題に応えた

面があって、そのための人間の努力として、ナショナリズム形成政策も部分的には考えられるというふうに実は思っているのです。ですからグローバルなコミュニティの形成、そのためのアイデンティティの形成をナショナリズムの形成とアナログカルに考えることができると思うのです。

4. 福祉とコミュニティ

司会：最後に、福祉とコミュニティについて、これまでに一定の議論が出ていますが、ここに問題があり得るかどうか、特に今日は福祉について中心的にお話いただきましたので、その点についていかがでしょうか。

大江：「福祉」という言葉がどうも引っ掛かって、多くの人たちは「福祉」と聞くと、ごく限られた人たちが行政から与えられるものという感覚でとらえてしまう部分があります。最近、上野千鶴子さんが「ケアの社会学」という言い方をしています。ですから広くケアとかサポートとかと言ったほうがいいのかなど感じがします。その部分が新たに共同性を獲得する最大の契機であると考えています。

新しい公共というか協働（コラボレーション）の議論を少し読み返してみると、それがなぜ必要なのかということに関して、あまり明確に書いていないような気がしています。私は、その部分は基本的に家族の変容にあると考えています。人口学的に見ても極めて大きな変動が、いま高齢者の人たちのところにきているし、もちろん少子化の問題もそうなのですが、そういう意味では広井先生と同じところに立っていて、少子高齢社会というものの実体部分、お題目としての少子高齢社会ではなくて実体としての少子高齢社会というものがいま新しい共同性をベースにしたサポートを必要とする時期にさしかかったという認識を持っています。

協働とか新しい公共というのを積極的に言っている自治体が大都市郊外の自治体であるということは、核家族が卓越的であった郊外で新たな共同性が必要

になっているからだと思うのです。そこでのコモンズというのは、ケアの資源です。それは基本的には人とその関係性ですが、同時に人だけがいればそれで成立するものではなくて、何かしらのハードウェアが必要になってくるわけです。そのハードウェアは、横浜市のように新しく地域ケアプラザという新しいハードウェアをつくるやり方もありますし、それこそ空き家や店舗を使ってやるようなタイプのものもあると思いますし、学校の空き地を使ってやる方法もあります。そういうコミュニティの拠点は、広井先生もおっしゃっていましたが、人や関係性を維持していくための装置、持続的安定的なケアを行うための装置として重要だし、中心を人々から見える、可視的にするという点で重要だと考えています。

広井：2点あります。1つは、今日プレゼンの中では触れなかったのですが、今まさに大江先生が話されたケアというテーマがあります。私自身は、むしろケアというテーマから出発していったらコミュニティに行き着いたという流れがあって、大江先生とある意味では逆の流れでした。ケアというのは概して1対1モデルで考えがちですが、しかし1対1モデルには完全に限界があって、どうしてもコミュニティという話が出てきます。コミュニティとなると、ソフト面でのコミュニティもさることながら、今日お話ししたような場所とか、土地とか、そういうところに行き着くということです。そうした意味で、私はケアとコミュニティというテーマは、いま大江先生がおっしゃったように十分こういう議論をするときであり意識をするべきだと思います。また、コミュニティからまたケアに戻るといふ、そういうフィードバックが重要だと思います。空間的な視点だけではなくケアのかかわりのほうに戻るといふのが重要だと思います。

それからもう1点は、今日ずっと繰り返し出ていた共同性といいますか、同心円を広げてつながるというタイプと独立した個人という話です。私自身は独立した個人という話を今日、強調しましたし、いつもそれを日常生活の中で意識しているようなところがあります。ナショナリズムの話がさっきありました

ように、共同性、コミュニティ感覚でつながるということの潜在的な問題は、閉鎖的、排他的なものになりやすいという点です。日本社会が抱えている一番の問題は、私はこれだと思っています。それを考えると、独立した個人の重要性ということ、これは日本社会にとって永遠の課題とも言えるようなテーマですけれども、どうしても繰り返していくということになります。では、それはいかにして可能かというのは、私もまだ答えは出ていないのですが、最終的にはそういう同心円を広げてつながっていくということと、独立した個人ということの両方が必要だということ自体は確かに言えることだと思っています。

小林：政治哲学の観点から今のお二人の意見に補足します。リベラリズムは、権利とか正義（justice）という概念を強調しているのに対して、最近ケアという考え方が非常に注目されるようになりつつあります。実はコミュニタリアニズムニズムの思想家にはケアに非常にシンパシーがある人が多い。ですから、ケアの思想とコミュニタリアニズムは、かなり通底していると思います。そして、私はリベラルな virtue とケアのようなコミュニタリアニズム的 virtue の両方の観点から考えていくのが必要だ、と主張しています。

国家とか公共体も、もともと commonweal とか commonwealth とかいう表現が用いられていたように、ケアとか福祉を目的の一つとして展開をしてきたのです。だから、そもそも福祉は公共体の存在理由の一つなのです。先ほど地球環境問題が新しい地球的なコミュニティの形成を誘発するという話がありましたが、国際的な貧困問題に対する国際的な福祉、地球的な福祉も、やはりそういうグローバルなコミュニティの形成が必要になる一番大きな理由の一つではないか、と思っています。そういう点で、ケアの意味も含めた新しいコミュニタリアン的なアプローチをグローバルに展開する必要性があるのではないか、と思うのです。

司会：これで議論を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。